

登山とスキーの一体化を目指して

五十嶋 博 文（太郎平小屋グループ代表）

昭和30年、先代の五十嶋文一によって開設した太郎平小屋の営業は、今年63年目となる。そして私自身が山に魅せられ、山小屋生活を自分の仕事と決意を固めるきっかけとなったのが高校2年生の夏であった。有峰から東谷を通り、小畠尾峠を越え真川から太郎平に立った時の感動は言葉にならず衝撃的であったことを覚えている。



登山者でにぎわう太郎平小屋

ただ単純に山小屋生活といつても、登山者を受け入れるだけがクローズアップしてしまうが、官庁や行政に対しての許可申請から始まり、小屋及び登山道の修繕や増改築、そして登山者のニーズに合わせて寛いでいただくためのアイデアを出し、又それを実現させ続けることへの労力も計り知れない。それに加え、遭難救助への対応、遭難事故防止への対策、安全登山の呼び掛けなど、長年の経験や体験から学び成長させられる部分も多くある。

五十嶋商事(有)の経営理念は当初「自然との融合と奉仕」であったが、現在は「感謝と奉仕」という解りやすさを前面に打ち出し、運営の理念を継いでいる。その山小屋生活60年を経て、登山者を迎える側

の視点から得た教訓を述べてみる。



薬師岳山頂の薬師如来様に参拝する博文

1 遭難救助について

薬師岳・奥黒部周辺エリアは北アルプスの最奥地に位置し、広大である。その上、長大な黒部川を有し、遭難救助には非常に困難な上の廊下がある。ということからおよそ単独では守り切れず、山に携わる関係者のチームワークが最も大切となる。

今なお語り継がれている昭和38年愛知大学生13名の命を奪った薬師岳38遭難は、その後の救助体制や、小屋の責任として何ができるかを Siberiaに問われ、また今後どう対策を練るべきか



折立登山口に建てられた十三重の塔（愛知大の慰靈碑）

を早急に考えさせられる事案となった。概ね人力で行われていた遭難救助にヘリコプターが導入されるようになり、近郊の山小屋との無線連絡体制、そして昭和40年には富山県警察山岳警備隊が発足され、昭和45年には薬師岳方面遭難対策協議会が発足されるなど、山小屋と警察や協力隊との連携が確立され、遭難事故のみならず急病人の収容などにおいても迅速な対応が可能になった。

現在は太郎平小屋に7月中旬から8月下旬まで富山県警察山岳警備隊、薬師岳方面山岳遭難対策協議会、山岳診療所医療班が常駐し、あらゆる安全の確保が可能になり、またグリーンパトロール、クリーンパトロール、高山蝶パトロールなどの応援を得ながら自然保護を行っている。

そして昭和61年から太郎平小屋を中心として薬師岳・奥黒部山域にある10か所の山小屋を結ぶ無線ネットワークを作り、定時交信を行っている。天候・登山者の入込・登山者の動向・登山道の状況・その他の異常など情報を共有することができることから安全登山に大いに役立っている。

また登山届の受理及び登山者からの相談への対応、遭難救助への全面的な協力はもちろんのこと、太郎平小屋に常駐する山岳警備隊へ宿泊者に向けての安全登山を呼びかけるスピーチや山小屋スタッフとの遭難状況や登山者からの相談事項の共有などの要請、定期的な登山道の調査、行事へのスタッフ派遣、遭難救助訓練会参加など楽しい山旅を提供するべく山小屋の使命に駆られ、努力をしている。

2 気象事情について

近年でも悩まされている異常気象による大雨や台風だが、昭和44年の集中豪雨は薬師岳山頂の祠が雷によって崩壊、有峰林道の崩落、黒部川に自然ダムができるなど、人間の考える想定を上回る自然現象

は命を脅かす事案として記憶に残る。当時、薬師沢小屋の宿泊者、スタッフ全員でカベッケが原へ避難を要する大惨事であった。現在ではインターネットによるウェザーニュースから大体の事態を予想することはできるものの、天気とは自然というてつもなく大きなものを受け入れ、従うしかできない分野であることを痛感している。翌年の昭和45年に薬師岳山頂の祠が観光協会によって再建され、父文一が薬師如来像を寄贈し、毎年山の安全無事を祈禱しているが、天気はもはや神の領域と言える。

3 獣被害について

獣被害に対する対策は年々深刻化を増している。平成23年高天原山荘の小屋開けに入ったスタッフの目にしたものは散々たるものでした。小屋閉め時に整理整頓されていた食料品のみならず飲料水、備品などが熊に荒らされて片付けるのにもどこから手をつけていいのかわからない状態だった。その後は食糧の越冬貯蔵には細心の注意をはらっている。更にテンやイノシシ、日本ジカなど見かける獣の種類も増え小屋の食糧のみならず、高山植物の保護についても問題視していかなければならない状況である。



熊に荒らされた高天原山荘

4 太郎平小屋グループ山小屋・スキーロッジの歴史

昭和30年6月25日厚労省より建設の許可があり、

5. 山小屋からのメッセージ

7月中旬に太郎山と上ノ岳登り口の間から黒部川側へ30mぐらい下ったところに太郎小屋が完成する。宿泊者数は60人程度でほとんどが男性であった。建築資材の運搬は人力によるもので、大多和集落から有峰、真川と数日かけてのぼっかが主だった。翌年の昭和31年に稜線（旧太郎小屋跡）に移設し、宿泊者数は150人と大幅に増えた。次いで昭和32年より我が社太郎平小屋グループの2番目の中屋となるスゴ乗越小屋を営林署より譲り受け管理をすることになった。昭和33年には折立からの登山道が完成し、工事用車両が折立まで通行できるようになったことから、太郎平小屋を現在の位置へ移転することとなった。この当時3人のぼっかさんがおり、1日に百kgの資材や食料を折立から太郎平小屋へ運んでもらっていた。昭和35年、スゴ乗越小屋を新築し36坪の2階建てとなる。栗巣野スキー場にて五十嶋ロッジの営業を開始する。そして昭和38年の6月に3番目の中屋である薬師沢小屋を新築するに至る。この年よりヘリコプターによる資材・食糧運搬が可能になり、いろんな意味で幅が広がった。翌年の昭和39年には太郎平小屋の増築が行われ、発電機及び無線機が導入された。昭和43年、薬師沢小屋の増築に加え、4番目の中屋、高天原山荘の管理を引き受け、本格的な営業を始めたのは営業許可の下りた昭和45年となる。この年栗巣野スキー場の五十嶋ロッジが全焼し、極楽坂スキー場にロッジ太郎を新築した。

昭和51年、太郎平小屋の食堂を改築し、昭和53年時の宿泊者数は7,000人を超えるようになっていた。昭和54年には太郎平キャンプ場に管理棟が建設され、山小屋の業務が拡張された。翌年の昭和55年にはスゴ乗越小屋は清水の取水を開始したのを機に、スゴキャンプ場を小屋の横に移転した。

昭和57年、薬師沢小屋の増改築工事が行われ、同時に薬師沢の出合の吊橋の補強工事も行われた。



昭和35年に建てられたスゴ乗越小屋



改築後の高天原山荘



黒部川にかかる吊橋と薬師沢小屋



高天原山荘のトイレ

昭和59年には高天原山荘の台所を改築し、従来小屋閉めと同時にたたむという作業が無くなった。そして昭和63年ロッジ太郎が鉄筋コンクリート5階建てに改築した。平成3年に五十嶋ロッジを売却、平成6年に立山駅前の五十嶋商店を全面改築、平成20年には極楽坂エリアにレストラン大東の営業を開始した。

平成に入り、客層及びニーズの変化からまずはトイレ事情に着手した。平成4年太郎平キャンプ場に富山県が公衆トイレを新築し、平成7年には太郎平小屋のトイレを水洗式（トレーナ方式）に改修した。平成15年環境省と富山県によって太郎平小屋の隣に公衆用バイオトイレが設置された。また同年、富山県自然保護課の指示により、携帯トイレの販売・回収を開始した。平成17年薬師沢小屋のトイレをバイオトイレ（おがくず処理設備）に改築、平成25年には高天原山荘のトイレをバイオトイレ（土壤処理設備）に改築している。

5 登山道について

昭和30年有峰・旧薬師峠間の旧道を小屋建築の資材運搬の為、修復した。昭和32年、スゴ乗越小屋の営業と同時に縦走路の整備が始まり、折立から太郎兵衛平までの新道が有峰ダム工事の業者などの尽力により開拓された。昭和34年富山県により、工事用自動車道路が折立まで開通した。昭和36年には小見と折立間において富山地方鉄道(株)ご協力の元、太郎平小屋貸し切りマイクロバスの運行が開始された。翌年の昭和37年には富山地方鉄道(株)による定期バス運行となった。昭和39年には薬師沢の出合にかかる吊橋が完成し、従来の籠の渡しは撤去された。また翌年の昭和40年の2年がかりで太郎兵衛平と三俣蓮華岳間に登山道誘導標識を設置した。昭和43年には薬師沢の出合にかかる吊橋は富山県により本格的に

新設、「薬師沢出合橋」と命名された。昭和46年、富山県による小型ブルドーザーを導入した大掛かりな工事により、三角点と太郎平小屋間の歩道が完成し、植物帯が保護される結果となった。昭和48年、薬師沢の徒渉点3ヶ所に蛇籠、昭和50年薬師沢と高天原峠間のB沢に鉄梯子がこちらも富山県により設置された。その後長年にわたり富山県により登山道の整備が進められている。そして昭和59年、雲ノ平山荘と雲ノ平キャンプ場間の木道敷設を皮切りに平成11年太郎平小屋と太郎平キャンプ場間、平成13年の太郎平小屋と上ノ岳登り口、平成16年の高天原山荘周辺の湿原に木道が敷かれた。この木道によりコースタイムが短縮され、高山植物の植生が蘇った。しかしながらそれに伴い木道でのスリップ事故が増え、救助要請が増えたことは否めない。今後の課題になっていくことは間違いない。



植生の復元につながった木道（太郎平小屋前）

6 「自然との融合」という我社の原点から

平成9年3月、フランスのラ・ターニヤで行われたIVSI（国際スキー指導者連盟アマチュア部会）の総会に日本代表団団長として出席させていただいた時に日本とヨーロッパの考え方の違いに目から鱗が落ちるほどにしつくり感じたことがある。日本では登山とスキーはセパレートに捉えているが、ヨーロッパでは登山とスキーが完全に一体化しており、そも

5. 山小屋からのメッセージ

そもそも次元からスケールの違いを見せつけられた気がした。



フランス ラ・ターニヤにて日本代表団

戦前の立山案内人はスキーの名手や選手が多かつたように、山を嗜むものはスキーが堪能であり、スキーヤーは困難な積雪期の山登りを行っていた。しかしながら、スキーの分野が山スキーとゲレンデスキーとに枝分かれをし、それぞれの楽しみ方ができてきた結果、山岳とスキーというセパレートな考え方方が主流になったように思える。

しかしながら近年、スノーボードやテレマーク、スノーシューなどの普及によりスキーを含めたこれらをスノースポーツと捉えられてきていることから、自然を相手に楽しむという観点から登山とスキーの一体化となる日も近づいているようだ。まさに自然と融合というフレーズがしっくり収まる。

終りに、自然とは美しくやさしいときばかりではない。時には恐ろしく厳しい姿を見せることもある。それでも色々な表情があるからこそ愛おしく、高貴に感じる。これが「高貴山」と呼ばれていた薬師岳の所以であろう。縁があり、薬師岳・奥黒部周辺の安全を守る役目を与えられたことに喜びを感じるとともに感謝の念に堪えない。また生活拠点を置く立山山麓には近年海外から多くの観光客が訪れる。旅に訪れる方々へ富山の自然のすばらしさを伝えること、山岳及びスキーにおいて安全あっての楽しみ

方を呼びかけること、これが「感謝と奉仕」に沿った経営につながると信じ、次世代に継ぐ。

《参考文献》

立山ガイド史Ⅱ P.314~379

著 者 五十嶋一晃 2017年6月30日発行

印 刷 有限会社武蔵野印刷所